

著者は1941年に中国東北部長春市で生まれ、多感な少女時代をソ連軍の侵攻と国共内戦の真只中を生き抜いた人物である。この過酷な体験を綴った『卡子』(「カズ」、文春文庫)を読んで深く感動して以来、彼女のその後の精神史を辿りたくて、書店で背表紙に「遠藤誉」と名前を見る度にその著書を手にしてきた。

最新刊『チャイナ・ジャッジ』は、重慶市書記・中国共産党中央政治局委員として、ポスト胡錦濤の有力候補の一人であったはずの「薄熙来がなぜ、どのように失脚したのか？」を中国の政治力学の中でのし上がり、逆に審判がくだって没落にいたる経緯をたどる中で解き明かしつつ、それと重ねて、「中国のジャクリーヌ」と呼ばれた、「その妻・谷開来がなぜ英国人を殺害するにいたったのか？」を多様な資料を駆使して解き明かしていくサスペンス・ドキュメンタリーである。

読み進めると、叙述の展開に当たっては必ず根拠となる事実関係を明示し、事実関係の裏を取る際には、中国語のウェブサイトの情報だけではなく、中国の幅広い世代にわたる豊富な人脈を通じての生の情報とご自分の深く豊かな体験に基づく実感を重ね合わせ、さらに、物理学者らしく論理的な整合性を何重にも確かめていることがわかる。壮大かつ驚くべきストーリーの展開であったが、荒唐無稽な感を全く味わうことなく読了できた。

著者は終章で述べている。

「新中国誕生以前から中国で生き、その後中国人留学生の教育に関わってきたことが、この追跡を可能にしたのかもしれない。」「薄熙来とその妻の事件に関して、疑問と事実をジグソーパズルのように埋め込みながら、私を真相究明へと駆り立てたのは、もしかしたら私自身の人生を重ねながら『自分の人生は何だったのかを確認したい』という衝動だったのかもしれない。」